

# ろんだん 佐賀



## 岩永 雅也さん

放送大学長

いわなが・まさや 1953年嬉野町生まれ。就学前に千葉転居。筑波大附属高一東京大卒一同大学院修了。大阪大、放送教育開発センターを経て2000年に放送大学教授、21年から放送大学長。専門は教育社会学。チヨウ、馬、自転車、農作業など趣味は雑多。千葉市。

詩人・室生犀星は、「ふるさととは遠きにありて思ふもの。そして悲しくうたふもの」(『小景異情』より)と詠じた。よく知られているように、この詩は遠方にある故郷を思い焦がれる歌ではなく、久方ぶりに帰省した詩人を冷たく遇した故郷金沢への屈折した思いを詠んだものである。現代口語的には、「やっぱり帰って来なければよかったな; 東京へ戻ろう; 大好きな故郷だけど; 悲しいな」といったところだろうか。ただし、これは、情緒と感性の世界に生き、それを表現する詩人ならではのナイーブな感覚であり、大多数の人々にとって、故郷は何より大切な帰りたい場所であり温かく迎えられる場所なのだと思ふ。

過日、この「ろんだん佐賀」の拙稿を読んでいた

## 故郷の来し方行く末

# 佐賀は遠きにありて...

賀」の拙稿を読んでいた。私は幼少期に生まれ故郷にいた在京の嬉野市吉田地区出身の皆さんにお招きいただいた。関東地区ふるさと吉田会(の例会に参加させてもらった。東京近辺には「佐賀県人会」はもちろん、「関東ふるさと嬉野会」や「関東地区塩田会」、大阪近辺には「関西ふるさと

ものだった。アトラクションの吉田ならではの「皿踊り」にも参加し、女面浮立も一生分堪能し、全員参加のじゃんけん大会では何と最後に一対一の決勝まで勝ち上がって(悔しくも最後に負けたが)、同郷会を心ゆくまで楽しませていただいた。

吉田会」など、関係する多くのふるさと会があり、毎年例会を開いて活動が続いているというものであった。例会には毎年欠かさずお見えになる嬉野市の村上大祐市長も参加し、他の各県人会、ふるさと会の代表なども見えて参加者も約80人に達し、会はいやが上にも楽しく盛り上がった。

さて、この「ろんだん佐賀」の私の担当も今回が最後となった。これまでの8回、その時々のテーマに触れながら、個人的エピソードも交えて何とか書き継がせていただいた。長かったような、あつという間だったような…。ともあれ、今回の連載で、遠く離れた故郷佐賀にあらためて向き合ったと心底思っている。

